シンガポールの教育から感じたこと

前シンガポール日本人学校クレメンティ校　教諭
北海道美唄市立東中学校　教諭　眞　田　　眞

キーワード：現地理解，シンガポールの教育，現地校訪問

１．シンガポールの教育政策

(1) はじめに

シンガポールでは2003年より義務教育制度が導入された。国際教育到達度評価学会（IEA）の「国際数学・理科教育動向調査」において1995年から世界のトップを走ってきた国としては意外な事実である。しかし，実際には義務教育制度が導入される以前から初等学校における授業料は無償であり，保護者はわずかな諸雑費を負担するだけであった。つまりシンガポールは義務化がされていなくとも，誰もが教育を受けられる環境が整備されていたことになる。さらに就学率・識字率が90％以上と高い教育水準で保たれている背景には，国が教育を受ければよい仕事につけるという社会のシステムを作り上げていることがあげられる。

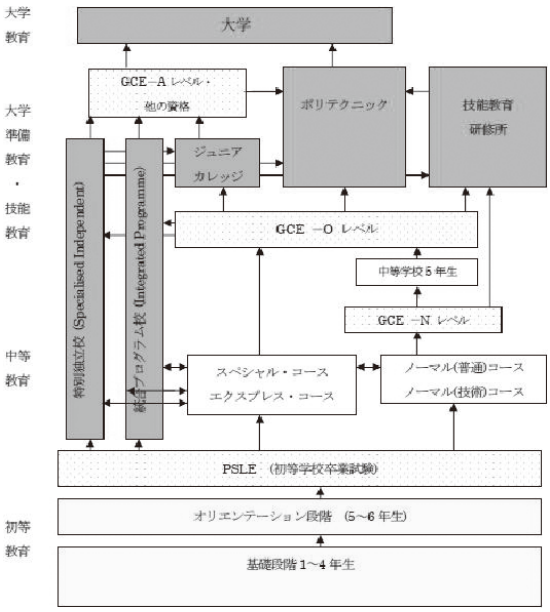
シンガポール教育省のホームページを見ると，国家としてのシンガポールが行う教育のねらいを「Thinking Schools, Learning Nation」というスローガンで表している。具体的に目指す成果については，目標を二元化し，公教育が期待する人間像を「大衆」と「リーダー」に大別している。資源を持たないシンガポールは，世界の市場競争に生き残るために「人的資源」を重要視している。つまり国にとって，強力なリーダーと質の高い労働力が生命線であり，20年以上も前から人材開発を国家の重要戦略として位置づけている。学校教育や職業訓練を通して基礎学力や職業能力の向上に取り組んでおり，当然，教育に関わる予算は大きくなっている。教育費を含む人材開発費は，実に国家予算全体のおよそ20％があてられている。

(2) シンガポールの教育体系

シンガポールの教育体系における一般的な進路は初等教育６年，中等教育４～５年，大学準備教育２年，大学３～４年であるが，中等教育から専門教育３年というコースもある。

日本と大きく違う点としてあげられるのは「初等教育」である。４学年修了時に，学校が独自に作成したテストが行われ学力の選別が行われる。その後，初等教育卒業時にPSLEとよばれる卒業試験を受け，この試験により中等教育へ進むコースが決められる（パスしなければ中等教育に進むことはできない）

シンガポールでは初等教育までが義務教育であるが，中等教育の段階ではっきりとした学力の選別が行われる。特筆すべきはPSLEの上位10％については，スペシャルコースと呼ばれるコースに進めることである。シンガポールでは国の政策としてこのような英才教育を取り入れている。



＜シンガポールの教育体系＞

中等教育以降も試験は続くが，日本のような入試は行われ

ない。Nレベル，Oレベル，Aレベルとよばれる認定試験を受け，その成績によって卒業後の進学先が決まる。

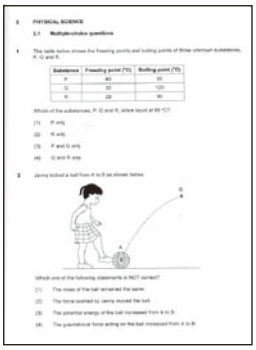
シンガポールではエリートの選抜・養成を重点に置いている感がある。シンガポールは物質的な資源が乏しい国であるので，人的資源の育成に重点を置いている。国民もそのことを十分理解しており，教育に対する関心は非常に高い。よりレベルの高い学校に進むことが将来の自分につながると考えており，それがそのまま学習動機につながっていることが多い。

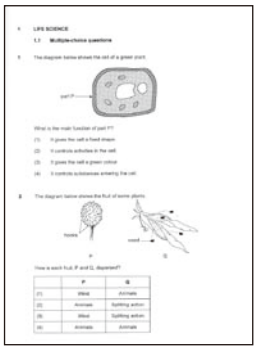
(3) 初等学校修了試験（PSLE）

前述の通り，シンガポールでは小学校から中等学校への進学をする場合，PSLEといわれる試験（初等学校修了試験）を受ける。この試験の結果により進学の可否はもちろんのこと，中等学校でのコース分けが決定される。

この試験は子どもの進路決定に大きな影響を及ぼすのはいうまでもない。2000年の統計によると資格取得率は95.8%であった。

右の資料は2004年から2008年のPSLE（理科）の過去問題の一部である。この問題集は市販されており（S$2）大抵の書店に置かれている。問題は「LIFE science（生物）」「PHYSICAL science（物理）」に分かれており，日本の小学校と比較するとレベルは高い。





2．現地校訪問から感じたこと

任期中は「シンガポールの理科教育について」を研修テーマとし，実地調査としていくつかの学校を訪問した。

(1) ヘンリーパーク小学校訪問（2007年8月）

2007年8月にヘンリーパーク小学校へ視察に行った。直接，理科の授業を見ることはできなかったが，理科室などの施設を見せていただいた。理科室の中に入ったとき，雰囲気としては中学校の技術科室に似ているように感じた。また，めずらしく思えたのがディスプレイである。右の写真は数あるディスプレイの中の1つであるが，中には力学台車・パチンコ・ミニカーなどが入っている。おそらく力学関係の用具と思われるが，これが実験器具としてよりもオブジェのような意味合いで置かれていた（飾られていた？）。実際に利用するものかもしれないが，日本の実験器具とは違い色彩も鮮やかで玩具のような印象を受けた。

(2) チーファー小学校訪問（2008年8月）

前年のヘンリーパーク小では，理科教育にかかわる施設設備及び教材を中心に見学したが，今回は理科という教科に対する児童の意識について関心を持った。無作為に抽出した児童8名に「理科は好きか？」「その理由は？」と尋ねてみたところ7名の児童は「好き」と答え，主な理由としては「おもしろい」とのことであった。なお，「嫌い」と答えた1名の児童の理由は「わからない」であった（内容がわからないのか，嫌いな理由がわからないのかは不明）。

シンガポールの児童・生徒は理科の学習を「好き」と答える割合が多い。日本の児童にも理科を「好き」と答える児童はいるが，主な理由のひとつとしてあげられるのは「実験」である。ところがシンガポールではほとんど実

験が行われない。一度だけ，実験を行った授業を見学したが，既習事項の確かめとして行われていただけであった。シンガポールでは実験の役割はこれが一般的であるとのことであった。シンガポールの児童が理科を好きになる理由として「実験」はあてはまらないようである。それでもシンガポールの子どもたちが理科を「おもしろい」と答える理由は，おそらく自分の生活に理科が直結していると感じているからではないだろうか。国際数学・理科教育動向調査の中でも「理科を勉強すると日常生活に役立つ」と答えたシンガポールの児童生徒は89％（日本は53％）になると書かれてあった。しかし，理科を「おもしろい」と感じている子どもが多いものの，教科書やテストの問題を見る限り，科学的な思考を伸ばすような指導内容はあまり見当たらない。シンガポールの児童生徒にとって，理科は「覚える」教科なのである。

３．シンガポールの教育から感じたこと

シンガポールの高学力の背景は単純に言えば「つめこみ教育」である。そしてその背景には教育政策から生み出された学歴社会がある。シンガポールの子どもたちの学習動機は認定試験でいかに良い成績を残すかにある。その結果，国際動向調査のようなテストでの好成績につながるが，それはテストのための学力のように思われる。建国から40数年の若い国とはいえ，世界第１位の学力を有しながらも，自国で開発したものや科学分野における著名人をいまだ輩出していないシンガポール。車や建物などほとんど自国製品を持たず，オリンピック選手でさえ帰化選手で構成している国である。人材開発に重点を置き国家的に取り組んできた結果が，自由な発想や開発する力を奪ってしまったように思えてならない。世界第1位の学力は必ずしも国を豊かにするものではないのだ。シンガポールを通して日本の理科教育を見れば，問題解決能力や科学的な見方・考え方の育成を目指すその方向が絶対に間違いではないことを確信する。そのためにも我々は日本の現状を把握し，日々の研鑽を積まなければならない。シンガポールでは最近になってエリートの選抜・養成だけではなく，スポーツや芸術など特定の分野に秀でた能力を持つ子どもたちのための学校をつくりはじめ育成している。これからもシンガポールの教育に注目していきたい。

４．シンガポールで過ごした3年間

シンガポールで過ごした３年間の中で，様々な「出会い」があった。一つは異文化との出会いである。住んできた環境，宗教，慣習によって異なる価値観（シンガポールでは自分が異なっているのだが…），異なるものを認めることの難しさ，そして大切さを学んだ。また，異文化との出会いは，改めて日本の文化を見直すことにもつながった。現地の方と交流をすれば必ず聞かれるのは「日本」のこと。考えてみれば自分もその人のその国のことを必ず尋ねている。「豊かな国際性」を身につけることは，日本の文化を自分の言葉で語れることに他ならない。私は他国の文化に興味を持つと同時に，より一層，日本の文化を学んでみたくなった。

「出会い」のもう一つはやはり人である。日本全国から集まった教師たち，現地に住んでいるシンガポーリアン，日本人。特に民間企業の方たちとたくさんお話しできたことは大いに勉強になった。マネジメント論，利益追求など，良い意味で教育の世界に取り入れることは有益であると感じた。

そして，日本人学校の子どもたちとの出会いも大きかった。北海道の子どもにはひとりも出会わなかったが（北海道の子は自分の息子一人），同じ日本の子どもとして何ら違和感を感じることはなかった。私たちが相手をしているのは「北海道の子ども」ではなく「日本の子ども」であることを強く認識させられた。私たち教師は「日本人」を育てているのだ。

帰国してはや５ヶ月。今ではあの暑さが懐かしい。不思議なもので，本当に自分が3年もの間海外に住んでいたのか，現実感があまりない。しかし身につけてきた感覚や学んだことは確かに覚えている。今はそれを今後にどう生かしていくか，考える毎日である。